473

特249

261

教祖様五十年祭に際して

中山正善

始

特249
261

本文は教祖様五十年祭當日參拜者一同に話した式辭である

教祖様五十年祭に際して

今日から二月十八日、即ち陰暦の正月廿六日まで、半月あまりの間、教祖様の五十年祭を勤めさせて頂くのでありますが、今日のよろこびにつけても、まづ思ひ出される事は、五十年前、明治廿年正月の有様であります。今その有様を主におさしづによつて偲ばせて頂きたいとおもひます。

丁度今より半世紀前即ち五十年の昔、明治十九年の舊十一月の中旬、教祖様にはお風呂からお出ましになる際、にはかにおからだの御動揺をお感じなさいましたが、その時お側の人々に『これは世界の動くしるしやで』と仰せられたとの事であります。しかし當

時の人々は、まさかこれが教祖様の御昇天を意味されたものとは思ひもおよばれなかつた事は申すまでもありません。その後とかく教祖様にはお身體の御様子が勝れさせられませんでしたが、人々はいかなる親神様の思召であらうかと心を傷めまして、種々と協議を重ねてゐられましたが、舊十二月十一日になりまして、教祖様のお身上は非常に御不快の御様子に拜せられましたので、飯降伊藏様を通じて御神意のほどを伺はれますと

――これはおさしづにも出てをりますからそれを讀まして頂きますと――

明治二十年一月四日（舊十九年十二月十一日）

教祖様おせきこみにて御身の内御様子革り、御障りに付、飯降伊藏さんへお伺ひを願ふと、嚴敷御指圖有たり（教祖様御居間のつぎの間にて）

さあ〳〵もう十分つみきつた、これまでなによの事も聞かせおいたが、すつきりわからん、なにほどいふてもわかるものはない、これがざんねん、うたがふてくらしゐるがよくしあんせよ、さあ神がいふことうそなら、四十九年前より今まで此道つ

どきはせまい、今までにいふた事みえてある、これでしやんせよ、さあもうこのまゝひいてしまふか、をさまつてしまふか

此時御教祖の御身上はつめたくなる、それに驚き、十二日（新一月五日）より鳴物不揃にて御詫の御勤なしたれども、お勤内々故、門をしめて夜分ひそかにする爲にや、御教祖は何もめしあがらず、十五日（新一月八日）の夜の相談には、（當時居合せし者は昨年教會の話し合の人なり）世界なみの事二分、神様の事八分、心を入れ勤をなす事、こうき通りに十分いたす事にきまり、明方五時に終る、十六日（新一月九日）の朝より御教祖御氣分宜敷、御飯も少々づつ召しあがりたり、夫れ故皆々大いに喜びゐると、又々御教祖よりおはなしあり。

さあ〳〵としとつてよわつたか、病でむつかしいとおもふか、病でもない、よわつたでもないで、だんだんときつくしてあるで、ようしやんせよ。

右の如く仰せあり、然るに十七日（新一月十日）には、御教祖御氣分よろしからず、

午後三時頃皆々驚き、又相談の上お次の間で飯降様に伺ふ、『教祖様の御身上如何致してよろしく御座りませうか、御勤も毎夜致さして頂きますが、夜ばかりでなく、晝も勤をいたさして貰ひませうか、すつきりなる様に御受取下されませうか』と伺ふ。

以下あまり長くなりますので『おさしづ』の拜讀は省略いたしますが、之に依りましてもわからせて頂けます様に、教祖様は御仆床になりながらも『勤め一條』をきびしくおせき込み下されたのであります。しかし當時は干渉と申しますか、取締りと申しますか、とにかく人を集めたり『おつとめ』をしたりする事が隨分むつかしくありまして、夜分門を閉めてコツソリとしか勤めさせて頂く事が出來ない事情にあつたのでございます。それでも皆々は眞劍で何とかして教祖様の思召にそはして頂き、一日も早くお元氣を恢復して頂かねばならんと云ふので、寒中殊に夜間の冷氣をも厭はず水行しての熱心悲壯極まる『おつとめ』をされたのでありました。

處が教祖様の御氣分は依然として勝れさせられず、その間いろ〳〵と尙も嚴しく『勤め一條』の程をおとききかせ遊ばし『さあ今といふ、今といふたらいま、ぬきさしならぬで、しようちか』とさへ仰せられたのであります。さうして更に『こゝろ定めの人衆定め、事情なければ心がさだまらん、むねしだいこゝろしだい』とも仰せられ、『お勤め』の人數こしらへをおせき込み下されるのでございました。

當時の人々は、此の『ぬきさしならぬで、しようちか』との御言葉が、まさか教祖様の御昇天を豫示遊ばされたものとは思ひもつきませんでしたが、御身上の勝れさせられない事が何よりの心痛で、教祖様の仰せ通り、何はともあれ、たとへ身はどうならうとも『お勤め』をさせて頂かうとの堅い決心のほどを申し合せて、當時中山家の責任者でありました父眞之亮様にその眞情を披瀝いたされたのであります。父とても教祖様の嚴しいおせき込みに副はせて頂き度い氣持におきましては、やむにやまれぬものを持つてをられ

ましたが、左様する事が又もや御老體の教祖様の御身に禍ひを及ぼす様な事があつてはと、お考へになる時、責任者としての心痛には、より一層痛烈なものがございました。

斯かるうちにも、父眞之亮様を始め一同の方々は、『勤め一條』の御神意に如何にして副はしていたゞいたらよからうかとの事について、毎日毎夜の様に協議されたのでありますが、如何してもこゝに教會の公認を得なければ、所詮『お勤め』させて頂く事はむつかしいといふ他はなかつたのであります。其處で其の由を教祖様に申し上げて、教會設置についての運びのお許しを願はれましたが、教祖様には『その事はおまへ達にまかせて置く、それよりも眞實の心定めが第一にかんじんである、價をもつて實を買ふ事を忘れてはならん』といふ意味のお話を懇々としてお聞かせ下されたのであります。軈てその中に明治十九年の舊十二月も暮れて、明くれば明治二十年の舊正月になりましたが、その正月元旦には、教祖様はお床から起き上られお髮をお上げになつて、さも御滿

足げに一同に向はれ、

さあ〳〵十分ねつた〳〵、この屋敷始まつてから十分ねつた、十分受取つてあるで。

と仰せ下され、お元氣よく御年九十歳の新春をお迎へ下されたのでございます。一同の方々が愁眉を開かれたのは申すまでもございません。處が其後舊正月二十五日になりまして、又々教祖様の御身上があらたまりましたので、飯降伊藏様を通じて御神意を伺はれますと、

さあ〳〵すつきりろくぢにふみならすで、さあ〳〵とびらをひらいて〳〵、一れつろくぢ、さあろくぢにふみだす、さあ〳〵とびらをひらいて地をならさうか、とびらをしまりて地をならさうか〳〵。

とのお言葉がございました　そこで一同の方々が協議の結果、扉を閉めるといふ事は面白くないから、扉を開けて頂く方がよろしからうといふので、『扉を開いてろくぢにならして下され度い』旨を答へられました。

すると其時伺の扉が開いて、

なるたてやい、どう云ふたてやい、いづれ〳〵〳〵ひきよせ、どう云ふ事もひきよせ、なんでもかでもひきよせる中、一れつにとびらをひらく〳〵〳〵〳〵、ころりとかはるで。

とのお言葉がございました。

斯くて明けまして、翌舊正月二十六日となりましたが、教祖様のお身上は大變御不快の御模様でありました。然も之までとても毎月二十六日には御神憑りの御命日としてひそ〳〵ながら『お勤め』をされてゐたのですから、今こゝで教祖様に喜んで頂くためには、そして少しでも教祖様の御身上を勝れて頂く爲には、どうしても陽氣に『おつとめ』をさせて頂かねばならんといふので、一同愈々覺悟をきめて『おつとめ』を敢行される

事になりました。この時父眞之亮様から一同の方々へ、『假令いかなる干渉があつても、一命を捨てゝもといふ心の者ばかりおつとめをせよ』と悲壯な覺悟のほどを申渡され、一同の方々もその心がまへで、いつ拘引されても差支へない様にとの用意から、はだぎやばつちや足袋等を二枚づつ着込まれました。

さて、此の日の『おつとめ』は十二時頃から支度にかゝられ、先づ甘露臺にて『おかぐらづとめ』をされ、續いて『十二下りのつとめ』を奉仕されました。教祖様には御休息所におかせられて、この勇ましくも悲壯な『おつとめ』の聲をおきゝになつて、大層御滿足の御様子でありましたが、北枕で西向きになられたまゝ、靜かなねむりに落ち入られました。

處が附添ひのおひさ伯母がよく〳〵注意してみられますと、教祖様の御脈は止つて早や御昇天遊ばしてゐたのでございます。それと知つて大いに打驚いて早速甘露臺にしら

されましたが、この時丁度『おつとめ』が終つて一同の方々の拍手の音が高く聞えてゐました。

信仰の目標を失ふたその頃の人々は、どうでありましたらう。たとへ『扉開いての御守護』をお願ひしてゐたとはいへ、それが教祖様が身をおかくしになる結果とならうとは、夢にも思はなかつた事であります。その心痛の模様をうかゞふ爲に、妻女に宛てられた梅谷さんの手紙をよませて頂きます。

前文御免、さて御親様は昨日二十六日午後の二時十分頃にお迎へ取りに相成り候、この事をきゝた事ならばまこと〳〵心配をするであらうけれど、何にも心配いらん、そのつもりでどうぞ〳〵吾顔へも出さずしいかりしてくれられ候、伊藏様へ願ひ候へば今迄に十分聞かせてあるとの事なり、これから道がころりとかはり、さあ〳〵これからや、皆のもの揃ふてゐるか、これしいかり聞きわけとのおさしづなり。御親様のお送りはいつやら今日で相わからず候。

そのつもりで大阪より參詣人は、一人もわれ歸るまで差止めて下され候、第一の用向

濟した事でありましたなら、すぐに大阪へ一度歸り候、それまでの所はたねのむねにて誰にもゆはぬ樣にして下され候、云々。

といはれてゐますが、この梅谷さんの手紙はその頃の人々の心持ちをよく傳へてゐるものとおもひます。

何れにもせよ、教祖樣は人々の期待に反して御昇天になつたのであります。しかも御約束の御壽命を二十五年縮めて御昇天になつたのでございます。そこで私達はなぜに教祖樣が二十五年の御壽命を縮めて早く身をおかくしになつたか、魂のみ此の屋敷に留まつて御守護下さる樣になつたかを、よく思案さして頂かなければならんのであります。

卽ち唯今讀ませて頂きました『おさしづ』によつても明らかであります如く、子供の成人をせき込まれその上からつとめをおせき込みになられてゐるのであります。

教祖樣は親神樣の思召のまに〳〵、世界助けのおつとめをおせきになつたのでありま

すが、その頃の道の子供には充分その思召が呑み込めず假令呑み込めても、色々の事情で思召通りには勤まらず、躊躇する様な事が多かつたのでございますが、教祖様はこの子供を早く成人させ度い御所存から、早く身をかくして御守護下されてまでも成人をせき込まれたのであります。

勿論此の身をおかくしになると云ふ事はわづか二月たらずの事情によつて現れて來たのではなく、おふでさき中には、その事が早くからお傳へ下されてゐるのであります。おふでさきを繙けば、心の立替へ世界一列助けをおせき込みになる事極めて切であつて、之に副ひ得ない人心のもどかしさを『神の殘念』として隨所に繰返されてゐるのであります。しかも尙人々が神命遂行を逡巡する所以の一面には、教祖様が生きてこの世に姿をお現はしになつてゐる爲に、却つて色々の心配をして眞精神を存分に發揮し得ない點があるを思召され、早くも明治七年以來數回にわたつて正月廿六日と明記され、御昇天

を御豫言遊ばされてゐるのであります。その他『刻限が來た』『日がせまる』『月日とび出る』等の言葉をもつて、一日も早く表へ出る様世界一列を助ける様と仰せ下さつてをりますが、この思召の極まる所、遂に明治二十年舊正月廿六日に御身をおかくしになつたのであります。

されば教祖様の御身をおかくしになるのは、かくれるとか、亡くなるとか、等の消極的な意味は寸毫もなく、ひたすら神意現成のために、肉體を離れ教祖様の靈が世界の表へ出るといふ、積極的なる思召に他ならないのであります。

卽ち教祖様の御昇天は、子供可愛い親心から、その人間的な肉體をかくしてまでも、早く子供を表へ出さうとの思召の現はれなのであります。子供の成人、心の普請をせき込まれ、その一歩がおつとめをせよとのきびしいお仕込みとなつて現はれ、一同心を合せておつとめをするのをお聞きになり、如何にも御滿足さうに、ねむるが如く安らかに

御身をおかくしになつたのであります。

人間心では、悲しい結果になりましたが、及ばず乍らも一同心を合せて、親神様の思召にちかいおつとめするその様をお聞きになつて、御満足して御身をおかくしになつたその親心。私は拝察するだに勿體ないとおもひます。このゝつびきならぬ厳しいおしこみにより、人々は悲しい中にも心を練り、やがて立ち上つたのであります。『節から芽が出る』とのお言葉の如く、私達教徒として、前にも後にも、もう一度とないその大節を一手一つの教團となつて、教會設置の運びともなり、信仰を結び上げたのであります。御存命のまゝの御守護を見せて下さる、教祖様の御導きのまゝに立ち上つたのであります。

只今五十年前の御模様を偲ばせて頂きましたが、更に今迄も、つとめさせて頂いて來たこの年祭の意義について、一言附け加へさせて頂き度いとおもひます。私達は御存命の

教祖様のもとに、日々御守護を頂いて暮させて頂いてゐるのであります。私達の心には教祖様は今日なほ御存命である事は今更いふまでもありません。然るに今日まで年祭を幾回となく勤めてまゐりましたし、親の年祭をつとめるについて、いろ〳〵とおさしづもあるのでありますが、その年祭とは何を意味するかといふ點を、よく御思案頂きたいのであります。教祖様は御存命である。然るに御昇天になつた日を記念するとは呑み込めぬとお考へになる方もあるとおもふのでありますが、この年祭とは單に人間が出直した日を記念するといふ普通一般の年祭ではなく、教祖様が一列助けのために、扉を開いていよ〳〵表へおのり出し下された事を記念し、心の成人をせき込まれた親心を偲ぶといふ點に、なほそれ以上の意義を感ずるのであります。さきにも申しました様に親神様の思召卽ちつとめをおせきになる事は、一つは道の子供に一つは世界の人々におせき込みになる上から、道の子供の信仰に鞭あて、御昇天になつたのであります　道の子供の上から思

案させて頂けば、心の成人を促す一手段として、お見せ下された大節なのであります。

お話中にも『十年一節』といふお言葉がありますが、人間はやゝもすれば心にすきの生じ易いものであります。常に心を引きしめ乍らも又時に大いに心のしめ直しを要するものであります。即ちこの年祭は吾心の成人についての一節々々のねぢで信仰のしめ直しをする旬であります。子供をおもふ深い親心から、身をおかくしになつた五十年以前の事柄を偲ぶ事によつて、私達の心の普請を反省する旬なのであります。然しやゝもすれば、弛みかける人間心にしつかりした信念のねぢを巻き直すと共に、この有難い親心を御禮申させて頂く、これが教祖様の年祭をつとめさせて頂く最も大切な意義であると、私は悟らせて頂いてゐるのであります。

事實過去の年祭を振りかへつて見ますとき、そこに人間思案外の大節と年祭との立て合つてゐるのを見るのでありまして、その試錬によつて、子供の信仰が一段々々と躍進

し又しめ直されて來てゐた事を見るのであります。

先づ一年祭は明治二十一年舊正月廿六日に行はれたのでありますが、其當時は未だお道も公認されてをらず、公然と祭式を行ふ事が出來なかつたのであります。然し教祖様の一年祭をつとめさせて頂き度いといふやむにやまれぬ氣持から、信者の方々は續々とお地場へ集り、とにかく盛大な一年祭をつとめさせて頂くことになつたのであります。ところが之は式典半ばにして差止められ、多數の信者は悉く門外に退去を命ぜられ、祭典に關係した者は、嚴しくしかりつけられる等、散々な目にあつたのであります。

而してこんな事があつたゝめに、教會設置の運動が促進されて翌二十七日には、あらしの中を一人ぬけ二人ぬけと中山家をぬけ出し、見張りの人には何とか口實をまうけて安堵村の飯田さんの宅で協議され、新三月十三日には請願委員が上京する運びとなり、新四月十日には早くも教會が公認せられる事になつたのであります。かくて最早信仰も

自由に出來る事となり、五年祭は明治廿四年正月廿六、廿七、廿八の三日に亘つて力のかぎり盛大につとめさせて頂くことが出來たのであります。處が十年祭、廿年祭は日清、日露の大節と立て合ひ、卅年祭には祭典の一年前、初代管長たる父様が出直し、小川事件が起つたのであります。更にその後につゞく四十年祭も關東大震災と立て合つてゐるのであります。

これ十年一節として、やゝもすればゆるみ勝ちな人間心に、信仰のねぢを卷き直す旬をお與へ下さつたものと信ずるのであります。

年祭の歴史は、私達道の子供の心の成人の一里塚であるといふ事が、如實に示されてゐるのであります。

この過去の先輩の心の華・信仰の誇りを受けついで、茲に五十年祭を勤めさせて頂くのでありますが、私達も又この年祭の大節を華とし、五ツ理をふく旬とさとり、心の華

を彩る時旬が來てゐると信ずるものであります。

此年祭の目標として、御存命の理の顯揚を唱へ、お住居給ふ教祖殿を造り百年祭を目標として、心の立替へを高唱して、雛形甘露臺の建設を終へましたが、いはゞ形の『普請』は不完全ながらも親神様の思召に近づかせて頂いたものと信じます。今迄の姿をかりに應法の姿といふならば、應法ならぬ姿に一歩立ちかへつたのであります。又五十年前の人々が、心をひかれてゐた『公然たる毎日勤め』も本日から勤めさせて頂けるのであります。いはゞ形の上、姿の上では、御存命の教祖様に喜んで頂ける迄になつたともいへませうが、更にその容物にふさはしい『心の普請』が完成されてあるといへませうか。此姿形にふさはしく心も亦、應法ならぬ正しい心の完成をされたといへませうか。私は尚此心の普請が姿形にふさはしく完成されたとはおもへないのであります。

この五十年祭こそ、心の普請をせき込んでゐられる旬、節だと信ずるのであります。

子供の心の成人をせき込んでゐられる句、節であると信ずるのであります。

親神様は『價をもつて實をかふ』とお教へ下されてあります。妻にふさはしい心の成人をお望みになつてゐると信ずるのであります。

此の意味に於て、私達は心に深く御教祖様御昇天の意義を悟り、御存命の理を強く心に生かしてゆかなければならぬのであります。教祖様が姿形をそなへて御生存下された當時の人々にとつては、その御言葉を守り行を重ねさせて頂くことが唯一の心の普請の道でありました。その教祖様は今日尚儼然としてこの屋敷にお住まひ下され、世界一列助けのために日夜東奔西走下されてゐるのであります。

即ち、教祖様の世界助けの御意志は、御昇天といふ事實によつて、窮極にまで高められ、『存命同様働く』とのお言葉によつて、永遠に極まりなきことを示されてゐるのであります。私達はこの永遠極まりなき御魂の御導きにより、此御魂と共に働かして頂いてゐるの

であるといふ信仰に徹すると共に、身を捨てゝまで一列助けを實現せんとして下さつた教祖様の御意志に添ひ切り、之が達成につとめ切らして頂かねばならんのであります。かくする事が現代の私達に與へられた唯一の心の普請の道であると信じさせて頂く次第であります。

時恰も世界の非常時と立て合つて、祖國日本が、世界に於ける正義の擁護者として將又東亞に於ける平和の支持者として、奮闘するこの時旬に際しまして、私達は、親神様の仰せられた『日本は根の國元の國』との御神意を體し『人の爲には身を粉にしても』といふ美しい助け一條の眞面目を發揮し教祖様の雛形を實踐して、この國家的非常時を乗越えると共に、更に東亞の啓蒙者として、又世界の救濟者として、道の光を世に顯揚しなければならんのでございます。私達は來る十二年の十月には立教百年祭を迎へさせて頂くのでございます。私達は今日此五十年祭をつとめさせて頂くに當りまして、五十年

以前に姿をかくして子供の成人をおせき込み下された教祖様のお心を體し、眞劍な『つとめ一條』の信念を土臺として、より一層心の成人につとめねばならんとおもふのであります。どうか皆様もその心でなほ一層心を引きしめておつとめ下さる様切にお願ひする次第であります。

尙之より一同教祖殿に御禮に上らせて頂き、私達の覺悟をお誓ひさせて頂き度く存じますから、皆様もその御心持で教祖様に御禮申し上げて下さる様お願ひいたします。永らくお話いたしまして、さぞかしお聞き苦しかつた事と存じますが、御靜聽頂きまして有難うございました。之を以て今回の祭典の御挨拶を終らせて頂きます。有難うございました。

終り

昭和十一年二月十八日印刷
昭和十一年二月廿六日發行　（非賣品）

著作兼發行者　奈良縣丹波市町三島　中山正善

印刷所　奈良縣丹波市町川原城三〇九　天理教教廳印刷所

右代表者　東井三代次

終